



昭和47年（1972年）
8月号（No. 326）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）

目次

本文

- 上高地河畔に歌い
つづけて十五年…坂倉登喜子 1
鳥海小集報告…保坂隆司 2
第三回現地支部長会議に出席して
岩手支部を訪ねて…成瀬岩雄 2,3
マナスル1972年の顔末…高橋 照 3
山と蝶のものがたり③…春田俊郎 3
ハーディ夫妻<立山>…石坂久忠 4
立山黒部
アルペンルート…諸岡一次 5
虎毛山…藤島敏男 6
和賀岳…望月達夫 6
久恋の和賀岳と…
高松岳、山伏岳…成瀬岩雄 7
高所登山技術考②…村井 葵 8
アタカマ探検隊…吉沢一郎 9

図書紹介

- 鶴の舞…川崎精雄 10
神々の白い峰…鹿野勝彦 10
花と氷河…織内信彦 11
尾瀬に死す…村井米子 11

会務報告ほか

- 青藍の海…木崎甲子郎 5
ごあいさつ…佐々木光子 7
本年度委員会名簿…8
図書委員会…11
六月理事評議員会…12
海外連絡委員会…12
図書室便り…13
復活・新入会員、住所変更…14
お知らせ…4,13

上高地畔河に歌いつづけて十五年

坂倉登喜子

「ウェストン祭に思うこと」

毎年六月の第一日曜日に、山開きをかねておこなわれるウェストン祭は、今年で、はや二十六回目を迎え、去る六月四日、雨にもめげず大勢の参加者が集まり盛会であった。

昭和二十二年に日本山岳会に入会して、第二回目のウェストン祭に初めて参加して以来、三十年までは個人的に、参加、三十一よりは、東京お茶の水の明大講堂で催した東京支部主催の「山の歌講習会」とのつながりもあってその当時指導を受けた立教の平野先生の指導のもとに、エーデルワイス・クラブの若い女性たちと、碑前でのコースを依頼されてから、歌い続けて早くも十五年の歳月が流れた。ある年はけしう柳の羽毛の舞う梓河畔で、今は亡き藤木九三先生の詩の朗読に感涙したこともあった。またある時は秩父宮妃殿下のお話に感激して心はずませて歌った日もあった。そうして参加

章の記念バッジのひとつひとつにその思い出が刻まれているような気がして、なつかしい思いがする。

最初の頃は碑前祭の翌日、信濃支部リーダーの指導のもとに、北アルプスの各コースへの記念山行があり、自然観察班には尾崎喜八先生の小鳥の声を聞くコースや、信州大学の先生がリーダーで植物観察などあって、レベルや趣味によって意義ある山行が催され、大勢の参加者は、充実した山行ができて大喜びであった。

しかしいつかこの記念山行がなくなり、前日の徳本峠越えの講演山行だけになって、碑前祭の後の講演会もだんだん時間が短縮されて、現在では碑前祭の後で、二、三の方のお話があるだけで、十一時半頃には終了することになっていく。

信濃支部が本部の事業だったこの催しを引継いだ頃から、ずっと主催されてきた、高山支部長がいろいろと細

かい心づかいで長い間の仕事を終えられ、現在の塚本氏に引継がれた今でも、裏方として助力されいられるが、いろいろこの長い年月の間のご苦労は、並大抵のものではなかったようにうかがわれた。ただ単にウェストン師が北アルプスの開発者であるだけのもではなく広く日本の登山界の恩人に対する行事としたら、本部のみならず日本全国の支部の人たちの協力参加によって、この催しはおこなわれるべきものではなかったかという話を聞いた。

信濃支部では二十数万円の資金面の苦苦労もさることながら、多くの登山者に参加協力してもらえようことを希望している訳だが、東京や地方の一般会員が少く、徳本峠越えはいつも信濃支部の会員たちとエーデル・ワイスの会員位であった。

しかし今年には静岡の山岳団体や、関西からの参加者や、一般の人たちも加わり二百名近い峠越えができて、地元の人たちもやり甲斐があったと大喜びであった。

徳本峠越えの日は晴れていて、穂高を迎いだ人たちは幸だった、碑前祭は雨で、傘をさしながらのコースは

寒さに手先がつかなくなるほどであった。今年は残念ながら尾崎先生の詩の朗読がなく淋しい思いであったが、熱心な参加者は最後まで、減ることがなかった。

今年は先発して濁沢へ入った人たちが碑前祭の朝横尾からかけつけて参加、徳本峠越えの人たちもあわせて三十名の大会合隊でコースができたことは幸であった。碑前祭の翌日は、記念山行に西穂へ登る予定だったが、雨のため中止した。

「上高地山研のこと」

カナダあたりでは立派な山岳会の山小屋があった、外国の登山者が行くに歓迎パーティを開いてくれるという話を聞いた。日本でも日本山岳会がそんな小屋をもっと早く建てて欲しかったといつも思っていた。

いよいよ上高地の山研建設も決定し、来年のウェストン祭の頃には、完成することと思うが、会員のためにも安い宿泊場所ができれば喜ばれると思う。そして山開きの後にも、講習会や登山指導をおこなって、少しでも会員のためプラスになるような催しをやって下さったら、建築基金に寄付の協力もする気持ちになれるだろうと思われ

る。エベレスト登山も終り、優れた指導者が沢山の会員のために、指導して下さることを期待してもよい時期がきたのではないかと考えるのは、私ばかりではないかと思っている。やがて山岳研究所が完成したあかつきには、親しみの持てる勉強の場でもあり会員たちの憩いの場でもあって欲しいと希いたい。過去お茶の水時代本会ルームに通い続け、会員のためにそして日本山岳会のためにきりがいりした奉仕をした昔の熱情…は、今、後進の女性たちの立派な登山を通じて心豊かな山と生活のレベルアップにかけている私なのである。

「ウェストン祭に捧げる歌」

私たちが、この十五年間歌い続けて来た碑前祭の歌は、山の歌の中から山開きにふさわしい歌を選んで、開催と同時に、「欲びの歌」を、碑前に花を捧げる時は、「山の花」を、終りの頃には、「別れ」の歌をあきめせず歌い続けてきた。

最近はこの他にも二、三の歌詞をブラリントして、開始前にあつた人たちが全員のために、歌の講習会形式で皆で歌うようにして、雰囲気盛り上げるようにしてきた。

しかしいろいろ山の歌をうたってきたが、どうにもこの催しにぴったりと似つかない感じの歌がないままに、十五年たつてしまった。

この辺でひとつ、ウェストン祭に歌う歌を考えようではないかと、三年前頃から、私がいい出して、土曜会山崎理事他二、三の方々にも相談してみたが、なかなかよい案が出ないまま過ぎていた。

今年のウェストン祭の折これは平野先生案だが、私も同じ思いで考えたことは、「ウェストンに捧げる歌」を作ってはどうかということであった。これこそまさにウェストン祭にふさ

わしい思いつきではないかと信濃支部の方たちとも話し合つて賛同を得た。JACクラブソングはいつかまたできるとして、まずウェストン祭に参加した人たちが、全員で歌える歌が欲しいという、私の念願がかなえられる日が……やがてくることを祈りたい。もし

快晴に恵まれた鳥海小集會

——現地支部長會議を担当して——

秋田支部 保坂隆司

かねてお約束しておりました現地支部長會議を、みちのくの鳥海国定公園で開催するにあつて、私達秋田支部の間にせめて三十名もおいでいただければ成功だと考え、その確保のため「山」に案内状を折込み願つてPRしたわけでありましたが、いざ申込みを受けてみると、かるく五十名を突破、当日受付も相次ぎなんと六十五名の参加者をお迎えするにいたりました。私達支部委員と地元山岳會を合わせると九十四名になりました。こんなに沢山おいでいただきましたことをまずまずとお礼申し上げます。

第一目の六月十六日は、ときおり大雨の降る悪天候だったので、矢鳥駅前の受付でお待ちしている間、明日はどうなるやらと心配でしたが、続々とおいでになる皆様のなつかしい顔々に、休憩所にある矢鳥公民館の大広間は、つきぬ話の花盛りでした。ここで小集會の開會式と自己紹介をやり、貸切バスで五合目蔵川ヒエツチに着いたころは、横なぐりの強風にガスも濃く頭は荒天の対策で一杯でした。

夕食を前に現地支部長會議を開催、後藤（山形）、伊達（宮城）、山本（静岡）、藤島（越後）、柴田（秋田）山代理（山梨）、新妻代理（北海道）の各支部長、成瀬副会長、伊倉理事が出席、小集會参加の山崎前理事、近藤、坂下

會員の中に気軽に作詞して下さる方があればと希うや切である。いつもの「ウェストンに捧げる歌」が歌える日を夢見つつ、いつまでもいつまでも上高地で歌い続ける山の子でありたいと、希う私たちなのである。

の両理事も加わり、上高地山岳研究所建築の件、現地小集會のあり方などについて懇談し、最後に来年の開催地を北海道にお願いすることになったが、本件は北海道支部が持ち帰った上で正式に決めることにしました。秋田の地酒や北海道支部持参のワインとともに盛會のうちに終了しました。

第二目の十七日は、昨日の風雨がうそのような快晴に、目ざす鳥海の頂が眼前に迫り、早朝から一同すばらしいの連発でした。雲海の上に東北の名山が顔を出した眺めはまさに千金の値でした。

七時出発を待ちきれずに、七高山めざして隊列は動き出しました。雪溪も最後の舍利坂も各人マイペースで登られ、七ツ釜付近から引き返される方もあるうかと、失礼ながらひそかに準備していた誘導、連絡員もつまりは頂上まで登れたと喜んでおりました。新山頂上まで往復される方々スケッチされる方、記念写真をとられる方と七高山は嬉しさにあふれんばかりの賑いでした。十二時半、何人かの尻にビニールが敷かれ雪溪の滑降が始まりました。ぐんぐん高度を下げ、七ツ釜から猿倉口に入り国民宿舎「鳥海荘」めざして歩きました。始めはキャーキャー騒いでいた一行もだんだん足とともに口も重くなり、マイクロバスの待つ林道端

までが大変でした。それから鳥海荘へ、温泉にひたつてサッパリした。こゝ、屋上ではこの鳥海村の郷土芸能「本海番楽」が始まりました。そして大広間での懇親會は、飛び入りや各界民謡の披露におよんで最高調に達し、参加者の交流はつきぬほどでした。

第三目の十八日は、再び一転しての風雨、鳥海はその姿をかくし、また来た時には笑いもしょうがとでもいいたげな様子でした。九時、マイクロバスに分乗して平家の落人部落といわれる百宅を通り、「法体の滝」を往復、天候も小雨から青空のぞかせるほどに立直り、ホホの葉に包んだ昼めしを食べながら小集會の反省をし、閉會式を行なつて解散と相成つた次第です。わずか二日半の小集會でしたが、地元町村や地元山岳會の啓蒙には大きな役割を果たしたといえます。そして私達秋田支部にとってもよき友好の機会でした。それなりに万全をつくしたつもりではありましたが、予想外に多くの方々からおいで頂いたこともあって、何かにとご不自由やご不満のむきもあつたかと存じます。紙上をお借りして深くおわび申し上げます。

いづれにせよ、七支部長を一堂に會しての現地支部長會議、五歳から八十歳までの山の男女がつどう現地小集會それがすばらしい快晴に恵まれただけに何よりでした。

来年の北海道での再會を祈りつつ、報告にかえさせていただきます。

第三回現地支部長會議に

出席して

成瀬 岩雄

今年の参加者は九十名近くの盛況で全員無事登頂の快を味わうことができたのは何より幸であった。これだけの多勢になると、たとえば、今回のような

好天候ではあったにしてもなかなか支部の方々の期間中の御心労、御苦勞は並大抵のものではないのに、終始手際よく完遂されたことに對してここに深く御礼申し上げなければならぬ。かねてから、前支部長、荒牧さんの温かい御人柄の永年に亘る補導については仄聞していたものの、この伝統を今なお引継がれている柴田現支部長、保坂隆司さん以下支部各員の温かい纏りを眼の当り拝見し、これに加うるに地元、町、村長のいたれりつくせりの御好意の結晶がなかったなら、とうてい今回のような楽しい一日の山行は味わえていたかどうかはできなかつたのではないかと……。参加者一同、ただお客面をして何の御手伝もせず三日間を過ごさせていただいたことをここに改めて感謝申し上げなければならぬ。山は勿論のこと、平和郷に囲まれた鳥海山荘の辺りではきれいなままだの静けさをいつまで、いわゆる、観光屋の汚染に汚されずに保たれるかどうかは気がかり無きにしてもあらうが、願わくば、これも小生の単なる杞憂となれば幸甚の至りと思う次第である。また、久しく訪れたいと念願していた百宅の村落を訪れ得たのも参加者一同にとっては誠にありがたいことであつたに違いない。かねてから、いまでもなく、名だたる豪雪のこの地は平家の落人の集落地であり、その昔、百世帯がこの地に追われて住みついたのが始まりでこの名が生まれたのだとは今度始めて聞いたのだが、最近までもちろんバスもなく歩く以外に訪れる方法がない、側路的存在……。それだけに秘境として知られてきたこの不便な地を今度、最終日のスケジュールに加えたのは、さすがに柴田支部長を始め支部員各位の行き届いた綿密な計画の結果だったとかげながら敬意を表する次第である。

最近、時々、本会の支部をお訪ねする機会が多く、各地の山行に御供できることは誠に楽しい限りではあるが、常に感ずることは支部の皆さん方の温かい纏り振りを眼の前に拝見でき、登頂そのものの喜びもさることながら、支部長各位の御人柄が判然反映しているなごやかな會合に、小生のような若くにも知らない駆け出し者が親しく迎えられることの連続で、なんと御礼申上げてよい……。これもやはり、山岳會の長年の伝統にまつわる、山に於てはじめて得られる「山と人」の結び付きの賜物ではないかと独り悦に入っている次第である。ことにツイ最近創立者の最後のお一人、武田さんを亡くしたばかりの本会にとっては、こうした先輩諸氏の御厚情は実にありがたいのである。それに反して、こちらとしても支部各位のさまざまな御要望におこたえできるようなことを一向にしていけないのは誠に申しわけない。汗顔のいたりである。

最後に、最終日の反省會で、今回のような催しにはすでに充て休養済み、山本静岡支部長、後藤山形支部長をはじめ、會員池田さん等の貴重な御意見があつたが、いづれも誠に當を得た御教示としてここに記させていただきます。

一、多人数になると、ツイ觀光的になり易いので、人数の制限も今後は考えなくてはならないのではないか。

一、何から何まで地元の御世話にばかりならず、班の編成などについても一考を要するのではないのか。懇親、交流の意味から行けば今回のような班の編成もよろしいだろうが、現地にゆかけて行く連の中、途中で知り合い同士を纏めて一班を編成する手、御心配も軽減するしすべて何から何まで地元の委

員各位に御世話をかけるのも考えものではないか。協力もぜひ必要ではないか……。

一、地元で計画された登山行程がまだ半ばにもかかわらず勝手に他方向に下山したりした者があったのは地元計画者各位に対して失礼でもあり、万一、事故でもあったりする場合には地元計画者に対して余計な御心配をわずらわす結果となる。とくに、今回は本部より出向の現役員、前役員連中がこの対象者であったことは誠に残念なことである。

(四十七・六・二十六)

博物学同志会のメンバーで、登山についても積極的で、実績もあった武田久吉、河田黙、高野鷹蔵、市河三喜、梅沢親光らは、山岳会の設立について関心を持っていたが、明治三十七年当時はまだ二十二、三歳で具体的な方法が見出せなかった。その時に小島久太(鳥水)の「甲斐の白峰」というすばらしい山岳紀行文を見つけて、ぜひこの登山家についてみたいと考えた。

小島が横浜に住んでいたということ、当時やはり横浜に住んでいた高野が、小島を探すことになったが、雲をつかむような仕事であった。高野は当惑していたが、偶然にある知人が小島と交際のあることが判り、明治三十七年の暮、小島の勤め先である横浜の正金銀行に高野が小島を訪問した。そして翌年の一月、高野は武田と二人で、小島の自宅を訪れて、三者の出会いが始まったのである。三人はもちろん山の話で夢中になったが、山岳会の設立についても話が交換された。

小島はすでにウェストンから日本の山岳会の創立をすめられていたもので、この話には熱心であったが、博物学同志会の組織と、高野、武田の二人

岩手支部を訪ねて

先般、金谷登原潤二郎さん、佐藤敏彦さんを中心として岩手支部が発足し山を中心とした仲間が新たに増えたことは本会としても喜ばしいことである。今回、秋田支部主催の現地支部長会議への途次、盛岡を訪ね、皆さん御多忙にも拘らず態々御集りいただいた会員諸兄とともに一夜を過ごすことができたのは小生にとっても誠に幸であった。かねてより、どこの支部をお訪ねしても支部長を中心としたなかなかい合と、その上、案外訪れる人の少ない山を手近に控えておられるのをまぢかの情熱に感心し、山岳会をつくるにしてもひとまず、博物学同志会に入会してからと考え、その場で入会の手続きをとってしまった。

高野、武田の二人が小島を訪れたとき新潟にいる高野仁兵衛の話が出た。高野は日本山嶽会という膨大な原稿を小島のとろへ送って話したが小島はまだ高野とゆくり話したことがなかった。小島は高野の原稿が日本の山

山と蝶のものがたり

小島・高野・ウェストン

3

春田俊郎

岳の歴史や考証を中心に極めて詳細、精密であるのに感心し、山岳会をつくる場合にはこんな篤志家も加えたらよからうと二人に話をしたわけである。

小島、高野、武田の三人は意気投合して交際を深めることになり、明治三十八年五月、ウェストンが帰国するとき、小島はわざわざ高野、武田を呼んでウェストンを引き合わせ、岡野金次郎も加えてささやかな送別昼食会を開

に見ては、うらやましく思っていたのだが、岩手もこのいずれの例に洩れず秋の東北独特の美しさを思い起こさすような山に囲まれた盛岡では今後たびたび支部の方々の御供がでると思ふとなんとしても楽しき限りである。やれ、本部だの、支部だのと堅苦しい言葉は別として、ただ気軽に山を語り、行をともにできる仲間が各地に散在して、交流、交歓の機会が増すことはおたがいに旅の楽しさをなおさら忘れ難きにするものであり、これを機会に岩手支部の各位に対しても、どうぞよろしく……とここにお願ひする次第である。(四十七・六月成瀬記)

いている。このとき、ウェストンはさらにさかんに日本の山岳会の設立をすすめ、いよいよ山岳会創立の機運が熟してきた。小島は高野仁兵衛にも高野、武田らの博物学同志会のことと山岳会創立のことを告げ、高野も小島のすすめによって、六月に同志会に入会、また山草会の城数馬も同じ頃博物学同志会員となった。

明治三十八年の七月七日に小島の紹介状を持って博物学同志会の高野と梅沢親光、河田黙の三名が高野の本郷の家を訪れ、いよいよ正式な山岳会設立の話が始まった。一週間ほど経って、今度は高野、武田に市河三喜を加えた三名が高野宅を訪れて具体的な問題を話しあった。七月から九月にかけては博物学同志会の主力メンバーと小島、高野の間には頻りに話し合いと手紙の交換が行われたが、山岳会創立の前途

マナスル一九七二年の顛末

高橋 照

「日本人の山」といわれるマナスルは、昨年十五年ぶりに第二登が達せられたが、その後マナスルに今まで長い間のブランクを破って各国が急に押し寄せた観がある。

一九七一年、韓国隊はJACのクラシック・ルートを進んで登頂を試みたが、おしくも一人の犠牲者を出したため、頂上プラトリー直下で断念せざるを得なかった。

しかし、今年にはいって、韓国としてはかなり大規模な隊を再びマナスルは必ずしも明るいものばかりではなかった。

まず博物学同志会と山岳会を二分した場合に山岳会にいったい何名入会するだろうかというところ、経済的に成り立っていないかどうかということなどは最も頭を悩ました点であった。そして何回かの議論の末、多少の反対もあったが、山岳会は「博物学同志会」の支会として発足させることに決められた。つまり、博物学同志会の会員の中で特に山に関心を持つ者の集まり、今でいう分科会という取扱ひであった。

このため博物学同志会では規約の変更が必要になり、会則第七條に「博物学に関係ある特殊の事項を研究する等の目的をもって本会内に支会を設置することを得」という新簡条を設けた。これを文字通り解釈すれば、山岳会というのは博物学に関係のある登山という原則がうたわれていることになる。しかし会則第八條に「支会に関する一切の事務は支会役員之を処理するものとす」とあって、山岳会のある程度の独立性が認められたのは幸であった。(文中敬称略)

東面に送った。だが、悲劇は再び繰り返され、ヒマラヤ登山史上第二番目という大量遭難を起こし、敗退した。これと全く同じ時期に、オーストリア隊は西側より登頂をこころみ、登頂はしたものの、隊員二人を失いリエゾン・オフィサーが行方不明という事故があり、マナスルにおいて、合計十八人という死亡事故が、同じ時期に発生した。

にもかかわらず、現在マナスル登頂を目指して、関西岩峯会や、同人エンク・フラウなどが計画を推し進めている。韓国隊も一九七四年度には、第三次の遠征隊を送る模様である。

以下簡単に、韓国隊とオーストリア隊について、その遭難の模様と顛末を記してみよう。

韓国隊の雪崩による遭難は、四月十日日未明に発生し、日本人のカメラマンであり、著名な登山家でもあった安久一成を含む左の十五名が帰らざる人となった。

副隊長 Hoo Sup Kim、隊長 Chang Ho Pac、Washai Kim、Swang Jung Chang、サード・Kinji Wangul Ilama(Phuplu) 第二サード・Pemba Ringe Lama (Mojo)、シムン・Ang Mingmar (Charna Ding)、Ang Mingmar (Gomila)、Pasang Lima (Rhamgo)、Ang Tenji (Thame)、Wangul (Cook Gompa)、Ang Dawa (Gomila)、Phrla Gyzlen (Pangkome)、Ang Mingmar (Tukla Near)。

ちょうど事件のあった四月十日隊は高度六五〇〇m付近に設置されたC3に宿泊していた。C3は

広大な雪原の丘の上に設けられており誰が判断しても、雪崩に対しては安全であると考えられる場所、一番上部に炊事用天幕、その次にはシェルバ用天幕が三張最下段に隊員用天幕二張が設置されていた。十六年前のJACC隊のC4付近と考えられる位置で、ここがいわゆるABCでもあった。

四月九日午後三時頃より多量の降雪があり、四月十日の未明、午前三時半頃、C3では二名のシェルバが六張の天幕の除雪を行っていた。

隊員の金積袋はシェルバの除雪の音に目が覚め、天幕内で空論に小用をたした。その時は安久も目覚めており、金は就寝のため再び寝袋にもぐり込んだ。その直後のことである。天幕は雪崩に襲われ、天幕は流されて凹地に四回落ちた後停止した。天幕の出口から朴報道隊員、安久、金隊員（末弟）の順に寝ていた。直ちに、安久と金は天幕外に脱出したが、朴は背骨の負傷で寝袋より出ることができなかった。しばらくして安久も右肩の痛みと左腹部の異状をうったえ、金も右胸の異状を知り鎮痛剤を出して三人でんだ。

朴が大変弱っている、安久と金は不自然な形で静止している天幕（ポールは折れ布地は各所で破れていた）を移動して、ビバークのできるようにした。痛みをうったえる朴を、金が頭部、安久が足部を持って、平らな雪面に寝かせ、安久、金の寝袋、スベアのスニーター等で、朴を防寒したが、朴が余り淋しがるので、安久と金は、頭から天幕の布地をかぶり、その場で朴につき添うことにした。

雪崩に襲われ静止した地点は、安久の所持している高度計では、五七〇〇mを指しており、その時は高度計の故障と思っていたが、実際は高度にして七七八〇m流されたことになる。金は安久に、これが雪崩というもの

だと初めて知らされた。朴は全く身体が自由がきかず、安久は右手が全く動かさず、左手だけしか思うように動かなかった。朴と安久は日本語で話し合っていたが、朴がそのままだでは三人とも駄目になるから、C3に連絡してくれといわれ、金はC3に向け直登したが雪が深くしてしばらく登ったところで断念し、二人のもとに戻って来た。デブリの中にはアイス・ブロックを沢山発見している。

安久はビバークしても、三日間は持ちこたえられずと判断して、そこに静止してビバークすることにした。C2とC3に連絡を取るべく、胸が痛むので声の出せない金に代って、安久がヤッホー、ヤッホーと叫んだが何の応答も得られなかった。やがて安久は、日本語で「チクシウ、チクシウ」と怒鳴っていたが、その時は金は日本語のその意味が判らなかった。

最初の雪崩発生後、一時間か一時間半経過して、三人は第二回目の雪崩に襲われた。約一〇〇m、あるいはもっとと流されたかも知れない。金はやっと思いで雪上にはい出したが、その時には朴も安久も発見することができず、視界も悪く、降雪中で三〜五m位先しか見渡せなかった。金はC3の方向とおぼしき方に登ったが、第三回目の雪崩に襲われ、また流されてしまった。しかし、金はまたも助かり上部に向かつて彷徨を続けたが、風雪と小雪崩に倒され、斜面を横に逃げた。右、左にクレバスがあり、移動することができず、足の入る位の雪穴を掘ってビバークした。

翌十一日午前、金はC2より下山中のシェルバに見えられ救助された。救助された地点はC2より下の五三〇〇〜五四〇〇m地点であった。またシェルバの生存者 Ang Kiar, Dawa Wangchu の二人のうち、

Ang Kiar は次のように供述している。

「四月十日私とダワはまだ暗い早朝天幕の除雪をしていた。一張目を除雪し、二張目（安久のいた天幕）を終り、他の天幕の除雪にかかろうとしていた時、突然雪崩に襲われ、私は一〇〇mほど流された。夢中でC3の方に戻ると、四〇〇mほど上でダワを見つけた。C3地点に戻った時は何もなく、大声で、皆を呼んだが、何の応答も得られなかった。そして、C3付近には、その日の午前八時三十分頃までいたが、雪崩は次々と発生した。しかし、降雪のため、雪崩を見ることはできず、轟音だけで判断をした。八時半頃よりC2に向かつて下山を開始したが、大変危険な状態で、雪崩の音が一日中轟いた。そして、その日は二人でC3とC2の間でビバークした。

翌十一日の朝五時に、ビバーク地点を出発し、六時にはC2に着き、C1に午後一時頃、BCには午後五時三十分分に無事辿りつくことができた」以上が生存者から得た当時の模様で、他の天幕にいた者は全員死亡している、その状況は判らない。

一方、西壁ルートを通ったオーストリア隊については、外電、ラジオ・ネパール、その隊に同行したシェルバの証言、出発前のカトマンズにおけるウオルフ・ガンク・ナイルツ隊長と群馬岳連D-IV隊の田中ドクター（一九七一年度マナスル西壁隊員）との会話などから判断して、次のような状況であったと推測される。

BC設立後、一カ月かかって西壁直下にC2（五八〇〇m）を作り、傘岩に向かつて西壁に登ったものと思われる。カトマンズに下山後、同行のシェルバの話だと、全行程一九七一年度の日本隊のフィックス・ト・ロープが使えたので、非常にスピーディーに登幕がで

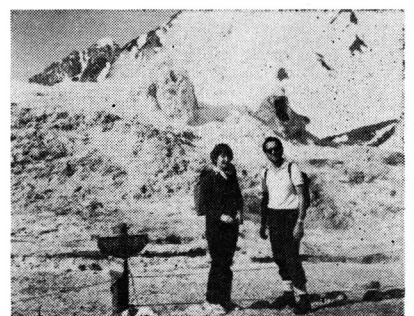
き、特に傘岩のワイアー梯子は完全に保全され、それより、プラトリーまでもフィックス・ト・ロープを頼りに登ったためイージーだったとのことである。しかし、あまりにスピーディーにラッシュをかけたため、高度順化が思うように行かなかったのではないかと考えられる。頂上往復後、傘岩上の雪庇の上で（一九七一年度日本の西壁隊のC4）強風のため二人が吹き飛ばされ墜落している。この場所はどんな無風状態の時でも絶えず三〇m前後の強風が吹き抜ける窓になっているので、二人はそこで疲労困憊していたため吹き飛ばされたのではないかと考えられる。一九七一年のマナスル西壁隊が残置した天幕やその他の物が、果して残っていたかどうかは判らないが、彼等もそこにキャンプを作ったことは間違いないであろう。

登頂報と遭難のニュースを無電でキヤッチした。その隊のリエーン・オフィサーは、その直後行方不明となり、隊長も一人ボカ下に下っている、リエーンが、どこかのキャンプにいたかは不明である。いずれ、その詳細は、オーストリア隊によって発表されることであろう。オーストリア隊の死亡者は A. Schurick, F. Jäger で、リエーン・オフィサーの名前は不明である。（六月十六日記）

◆

酒沢キャンプのお知らせ

青年懇談会主催 8月10日から20日まで。友人家族同伴大歓迎。天幕炊事用具有り。食糧寝具各人持参登乗の飲む、ご自由、キーパーがいまですので気軽にのちより下さい。宿泊費は初日お一人五百円です。



地ごく谷でのハーディ夫妻
立山を歩く
石坂 久忠

日本山岳会富山支部の例会で中田支部長から、ニュージランド山岳副会長のホルマン・ハーディ氏が夫人とともに立山を視察されるので案内をするようにとのことであったが、支部の方で一度は断ることもあった。だが、ある機会に再びそのことが表面に出て案内することになった。決まった以上その任に当たらねばならず、渉外的なことは若林委員長に一任し、野島さんと私が現地の案内役となった。

日程表から他方面に照会して細部をつかみ電話連絡で視察の円滑化を図り五月二十三日十四時立山アルペンルートの大観峰で落ち合うことにした。

大観峰に向かう途中室堂ターミナルホテルで細部の宿泊打合せを行ない、十三時五十分佐藤藤次氏とともにハーディ氏を出迎え、黒部観光K・Kのご厚意によって現地まで北山、石黒の両技師を派遣され、この両技師の案内で

ロープウェイや立山トンネルの建設から現在、将来の様子をきき立山トンネルを歩いてぬけ十七時半春陽に輝く室堂平に出てホテルにおさまった。ハーディ夫妻はG室へ、増田洋子、小原晴子、山口節子、佐藤テルの諸氏に二人の男性はE室におさまる。

ハーディ氏は登山家であり、建築家でもあるため、なかなか眼のつけどころがすくなく何でもノースバインのロープウェイ、機械装工作、着水排除装置、ホテルの建築工法、自然環境との調和など、ふし穴の視察者とは異なった観察眼で意欲的に頭と脚で立山をみ、夫人も日記の記述に忠実であった。

二十四日八時、スキーでターミナルホテルをたつて室堂にでた。加賀藩が造った小屋は雪に包まれみることができず、ここで二班にわかれスキー班は山崎カール方向へ、つぼ足班は雷鳥荘へ雪面に跡を残して去っていった。スキー班はノルマン・ハーディ氏、小原、山口さんと私、山崎カールを回って浄土川にシニブルのこし雷鳥荘へのコースをとった。転ぶ人もあつてなかなか面白く、時おり雷鳥の歓迎をうける。雷鳥のことを一応説明すると自然保護と観光登山者の悪循環に開発の汚点に対応する施策の高度な要求の研究を説いて下さった。それは調和ある開発と山に対するマナーのうつけであらう。

滑りまくって雷鳥荘につけば先着の方々は設営よりしく欲待して下され、話を華がさいて風呂をあげ、地ごく谷を回って十六時半ホテルについた。顔は日焼けと雪焼けで婦人の方々に気の毒なほどだった。夕食までE室で明日の行動をねる。スキー班は一の越へ、つぼ足班は天狗平へ下り、スキー班を待つことを決める(増田氏は大町へ出て帰京することになった)。

就寝前に一人の観光客から新聞をえたので次のことを知る。信濃毎日(六月二十三日付)の高原調に「ようこそ」にはじまり、カンチンゲンガの初登頂者として世界的に有名なノルマン・ハーディさんはエニッド夫人とともに北安曇白馬村にやって来た。建築家のハーディさんは立山黒部アルペンルートなど日本の高山ケーブルや耐震建築について見聞を広めようというのの目的(中略)夫妻は北ア山ろくのものに「樹木が自然で美しい。民家の古さに魅力のですね」と感嘆し、日本酒や山菜料理に舌つづみを打ち、なつかしい顔ぶれに囲まれ、ひと時を楽しんでいた、と控え目にのっていた。

二十五日早朝目をさましたので外に出てみた。一台の軽四の中で三人の人が寒い寒いといっている。そして一人の人が立山はどの山かと質問をする。あれが立山です、というところであれで、そこで私は許可なしでここまで車で行ったのですか、という許可が会わなかったのがあつて来ましたが、それなら下りましようといつて去っていった車があつた。

珍しい快晴で、立山に昇る朝日は大月輪の傘に輝き、八時室堂をたつて一の越に向かう。帰路を考え浄土山より高度をかき、一の越へ下って黒部の山々を眺め、雄山の頂上へ向かうことになる。スキーをデボし、十一時二十分頂上に立ってみると富士の高峯の姿も見えだし、三百六十度のパノラマをほしにましますことができた。ハーディ氏の脳裡深く印象にのこったことは、雄山頂上の社であり社務所の不調和な姿であつたと思う。また頂上社前の小石にあるサインの数々、日本の屋根の姿であつたであらう。建築家としての目でみる社の組み方に異様な注視があつたように感ぜられた。

スキーデポ地点から天狗平まで四十分の滑行ではあつたが、途中で鳥類の変死を幾十羽となくみた。写真にも撮った。天候の激変によつて凍死したのか、それとも天敵だったか、詳さに調べた時間もなくて残念だった。天狗平で「みさご」か「さしば」の死がいを見てもこれまた驚いたものである。天狗平小屋で、うどんをすすり、高原バスにゆられながら、十六時三十分文部省登山研修所についた。訓練施設を西野参所長の案内で見学し、ハーディ氏持参のニュージランドの山々、南極のスライドを説明を交えながらみせてもらい遭難救助研修会の8ミリ映画を観賞し深い眠りに入った。

明けて二十六日黒部観光K・Kの本田技術部長を訪ねるため、古い古いコテッサーで富士へ出る。九時三十分頃から十二時近くまで、立山アルペンルートの説明をきき、とくにロープウェイの技術的諸問題に研究の眼を開いた話し合いが行なわれ「つるき」で日本そばをすすり、アルプス四号で高山へ去っていった。

四日間の立山の旅ではあつたが、立山の印象は実によかつたらし、でも「ごみ」が散らかつていたのは感心できないものがあったようだった。ある時、登山は理屈のみではなし得られないもので忠実な実行力によって目的を達成し得るし、自然を活かして自分を知らぬものか」といっておられたことを思い出しながらブラットホームでわかれた。

立山黒部

アルペンルート

諸岡 一次

土曜会のおり、山崎さんから立山黒部観光会社より日本山岳会々長あて、今シーズン立山黒部アルペンルート、

室堂ロッジ、開業開始に先立ち披露の招待状が来ているので誰か代理で出席される方はないかとの話があつたが誰も申出がないので僕が申出て行くことにした。

四月二十四日午前六時五十分新宿駅アルプス一号で出発する。この列車はシーズン前のせいか空いていて快適だった。十二時五十分信濃大町駅に着く。受付には大町出張所々長が出迎えてくられ、マイクロボス出発まで約一時間以上あつたので、まだ見ていない大町の山岳博物館を見に行く。小高い岡の上で山の眺めもなかなかよく、桜が満開だった。

午後一時、会社のマイクロボスが第一陣十五名ほどで出発する。専用道路を走り扇沢の手前より残雪があらわれ、扇沢で一たん下車し、関電が黒四工事を行った時の工事用のトンネルへ皆ヘルメットを冠り入る。トンネルの中で長野県と富山県の県境を通過する。黒四ダムへ着くと、職員案内でダムの説明など聞き、ダムの水は少なかつたが、四囲の山の残雪は多く実によく景観だった。

ここより黒部リールウェイで二時半、黒部平に着き、展望台にて快晴の山を眺める。また、ここよりロープウェイにてこのコースの最高展望地点、大観峰に着く。屋上展望台はかなりの積雪で職員の方が我々のために除雪して道を作ってくれる。

この展望台はまた実にすばらしい眺めで、針木岳は正面に立派な容姿をあらわしていてじゅうぶん四囲の景色を眺める。ここよりマイクロボスで立山トンネルに入り、三時過ぎ室堂ターミナルに着きロッジに入る。まだ早かつたので付近の雪原を散歩する。10m以上の積雪である。立山頂上もよく見える。六時半よりロッジの食堂にて歓迎の

宴会が始まり、社長代理の挨拶あり、歓談に入る。約五十人位の招待者であつた。

翌二十五日は六時に起き快晴の外へ出る。雷鳥がロッジの玄関近くまで来ていた。雪原を少し遠くまで歩く。帰りは天気がよくたたら富山へ下るつもりだったので、前夜ロッジの支配人にスキーの事を聞いたら、どうぞスキーは下のホテルへ置いて行って結構とのことだったので、一人だったので歩いて下ることになった。富山の深井先生、立山町の観光課長、旅館組合長も富山へ下られるとのことだったので同行者ができて楽しく下ることができた。途中また雷鳥の群に逢い、スキーリフトは一本もなく建設の話があるようであった。よいコースであると思う。

天狗平の小屋へ立寄り、弥陀原ホテルへ着く。今シーズン初めて美女平より登ってきたバスの出発をホテルにて待ち、美女平、千寿ヶ原を経て富山に出て、金沢、米原回りで帰京した。このたびのアルペンルートを通して現今の欧州アルプスはもちろん、エベレスト、南極の一部までも意味で観光地化を呈していることを思いあわせると立山の開発も当然の成行きに思われる。今後、山岳会でも新たな見地から観光との兼ね合いにつきこのようなコースについて考察してはいかかと感じた次第である。(六月四日記)

青藍の海

いかがお過しですか。南国琉球ではもう夏雲が流れています。このたび南冥の地、琉球大学に転任しました。亜熱帯の太陽と青藍の海の生活を楽しみにしているしだいです。

六月十日

(木崎甲子郎)

虎毛山

藤島敏男

この山がはじめて私の注意をひいたのは会報二九号(一九七〇年五月)七頁で、会員小林智明君の「虎毛山より栗駒山を望む」写真をみたときである。地図を按ずるとなかなか奥深い山のようでもあるし、それに標高も千四百mを抜いているとあれば東北地方で私の登りのこした山では、まあまあの高さ、一応考慮に値するとおもった。

以来仲間の望月達夫君などと、ときどき話題にのぼったこともあるが、この山がつよく私を誘惑したのは、会員今井雄二夫妻の著「続・心に山ありて」(一九七〇年同社刊)に「虎毛山」紀行があり、その冒頭に「日本にもまだこんないい山が人知れず残されている

間は、山登りはやめられない——虎毛山へ登ってみてそう思った」とあるのをよんでからである。

これは是非とも登ろう、だが人知れず残っている山で登山者に出会ったりしては幻滅だから、連休者にもつてのほかに、週末も避けて火曜日に東京をはなれた。

五月二十四日(水)さつき晴れ。鷹の湯から赤倉沢林道の終点まで車で十五分、「鬼首」図幅に五七六mと記されているあたりである。沢沿いの細道を二十分。靴をぬいで徒歩したところに、真新しい国定公園何かの案内板があって、登路が主稜に達した分岐点から、高松岳へ十一kmと記されている。これは意外だった。

私達を送ってくれた運転手は、この日山菜採りにいくので夕刻迎えには来られぬといった。それでは同じ道を戻りハイウェイをトボトボ歩いて、湯ノ

又温泉まで入るのは容易でない。今日のうちに高松岳へ縦走して泥湯までいけば、二日分が一日で片付くと相談一決、私は缶ビール二個、夏ミカン一個、ウイスキー五〇〇ccを同行の会員伊倉剛三君に托した。いくらかでも荷をかるくしてというわけである。

さて登りにかかる。恐らく昨年あたりに手入れされたであろう。よく刈払われた歩きよい路が今井氏の文にもあるように見事な原生林の中を上っている。樹がぐれに見え山肌は、まるで緑の炎とでもいいたような、さかんな新緑におおわれている。斧鉞の入らない森林の美しさ、これを無残に伐り倒して恥じない人間は、一体どんな心の持主だろう。鬼畜の如きものか。

主稜に達して分岐点から眺める虎毛山は茫沚として、寝そべった虎の胴体みたい、樹林におおわれておろかな山だ。石楠花などの灌木や笹の丈がだ

んだん小さくみじかくなって、ついに山頂。五月とはいえもう初夏のような光、無風快晴の真昼とき、まるで刈込んだような芝草の上で乾杯のビールをうまかったこと。真東に幅ひろく根をはった栗駒山もさることながら、真西に美しい雪の縞をいれた神室山から水晶森、黒森へかけての連峰や、これから立ち向かう高松岳が私の眼をひいた。開花期にはさぞ美事だろうとおもわれ

で、一面に敷きつめられている池塘の景観も、棄てがたいものがあった。たしかに虎毛山はいい山だ。こんないい山をまたひとつ「登山譜」に加えたことに満足して私は山頂を辞した。分岐点に戻り荷を整えて、尾根縦走にとりかかった。高松岳まで十一キロ余、三時間半から四時間とふんだのだが、きりひらいたのは恐らく昨年ぐら

いであろう、根曲竹や灌木の切株で歩

きつらいこと甚しい。まるで逆茂木の上を渡ってゆくようなものだ。その上、地図でみるより尾根は屈曲している。のぼりくらりもはげしい。小石祠のある高松岳頂上をふんだのは午後五時半、五時間を要したわけだ。切りひらきのできるまは、足の踏みいれようもない密林だったにちがいない。それだけにこの山稜の林相の美しさは、私の心にながに残るであろう。

日が傾いて虎毛山も栗駒山も暮色が漂う。それから小安岳の中腹をまいて泥湯まで五キロ余の道はよく踏まれているが、遠くて長かった。途中でトッブリ日が暮れて、小檜旅館へついたのは午後八時。朝八時半車を捨ててからほんとうに長い一日であった。

(一九七二年六月記)
訂正 会報「山」第三二五号武田久吉博士のごこと中、小島鳥水は小島鳥水につき訂正、お詫びいたします。(編者)

和賀岳

望月達夫

かねて和賀岳へ登りたいという希望を、岩手支部の佐藤敏彦君が覚えていてくれて、去る六月十、十一日はどうかと誘いをかけてきた。私の都合も悪くない。ただ十日には六義園の閑談会があるのだが、この機会を逃してはと九日の夜行に乗った。同行は会員の川崎精雄、山田哲郎君。十日早朝盛岡へ着いて、早速佐藤君や同行してくる岩手医大の若い藤岡知昭君(去年ヒンブークシユへ行った)らとコースの相談。昨日まで二、三日かなりの降雨があつたから、沢より尾根を行つた方がいいという。その意見に従って沢内村沢へ向う。山岳部の小型車に便乗して秋田街道を疾駆、途中から南折し

て山伏峠の隧道をぬけ沢の奥で車を降りたのは九時頃。途中かなりひどい俄雨に遭ったが、この頃から雲が切れ、日が射しはじめて、どうやら天気は好転の模様である。

ブナの巨木の佇立する牧場をぬけ、尾根に出る。その尾根を西へ向ってひたすら登る。ブナやトウチの新緑が美しい。喬木から灌木までの新緑が美し次に没する頃、モッコ岳(二一七八m)の彼方に岩手山の青い姿が望まれる。境界の峰(二二六〇m)にたつと眼前の雪溪をかけた高下岳(一三三二m)の彼方に、初めて和賀岳(一四四〇m)が姿を現す。直ぐ北に隣りする峰に大きな雪が残って、なかなか魅力的な山容だ。東に遠く早池峰が、南にはおろかな焼石から栗駒山までも、淡く視界にあった。大荒沢岳(一三三二m)との鞍部まで下って、そこにテントを張りおえたのは午後一時半頃。

風はやや強いが天気は益々よくなつて、すぐ北西に朝日岳(二三七五m)が、そして遙か北には秋田駒が美しく眺められる地点だった。

十一日も幸い好晴に明けた。五時十五分テントをあとに和賀岳へ向う。まず大荒沢岳を越え、一旦急降下して尾根を南へ辿る。その付近は強風が卓越すためか、草木はすべて矮小で、ハイマツ、シヤクナゲを所々に見る。高下岳の肩に近い所まで一旦緩登すると、今度は西へ向ってまた降下。イワカガミ、ショウジョウバカマ、ハクサンチドリ、シラネアオイの花が少々。左に和賀川の源流、右にマンダリ沢が深く切れこむ。最低鞍部から灌木帯を急登すると、そこからさきは、もう大きな登り降りはなく、所々に残雪のおかれた草木帯となり、和賀の頂上も近づいて、実に気分がいい尾根歩きがつづく。頂上の三角点に着いたのは八時二

十分、テントからタツブリ三時間かかった。天気よく、ささげるものがない山頂からの展望は申し分なかった。西に小松森、葉師岳、白岩岳、南に真昼岳、遠くに白い鳥海山、森吉山などが、既述の山々に更に加わった。

一時間余休憩して往路を戻る。テントを撤収し、山を下って再び牧場まで来て、ホトトギスやカッコウ、ウグイスの声をききながら、清流のほとりでは紅茶を沸かした。それから、迎えに来てくれた茶谷君運転の車で、沢の古い民家を買しながら山を離れる。まだ一日余裕のある川精、山哲両君を国見温泉まで送って盛岡へ帰着したのは午後六時半。佐藤君宅で風呂を貰い、汽車に乗るまで直利庵で笠原支部長ら数氏と懇談の一刻をもつことができた。

往復夜行で、中一日はテントというあわたしい山登りは、余り語るに足らないが、「サンデー毎日」のような

身分にはまだなれない私としては、もって満足している。永いこと登りたいと思っていた和賀岳に登り、それが想像以上にいい山だったからである。また、この山塊には朝日岳、支度内モッコ、モッコ岳、高下岳等の心ひかれる山が多く、その大部分に道はない。また山中にはまだ小舎が一つもない。しかも山腹をうづめる原生林は、ほとんど伐れられていないので、山がいかにも原始的で美しくあったことも佳かった。こんなに人の手が入っていない山塊は、全国でも極めて少ないことを思うときたいと、痛切に思わずにはいられなかった。

サボートをしてくれた藤岡君、運転をしてくれた原田、茶谷君どうも有難う。(一九七二年六月十六日)

久恋の和賀岳と

高松岳、山伏岳

成瀬岩雄

戦前、東北の山の静かなところを漁り歩いてた頃、初雪を冠った和賀岳が遙か遠くに、馬鹿に立派に見えてきた、この山にはぜひと思っていたのだが、何分、当時としてはあんな奥の奥に一人で近寄れるものでもなし、というて諦めてはなかったのだが、先年白岩岳に登った際、初めて間近に眺め得、数年前にはようやく登路も尾根通しきりひかれ、昨年は全日本山岳連盟の登山もこの山を中心に行なわれたと聞き、これならいよいよこの山に行けるかな、とひそかに今日を期待していたのである。

鳥海以来、ここでもまた、柴田秋田支部長、岳連の鈴木理事長の御懇切なる手配に甘え、会員牧野衛さんと、地元のマタギ、真木氏他一名の補導に従って、天気は上々とはいえなかったが、無事、頂上を踏むことができたのは小生にとって幸福というより他、何物もなかったのである。

それに、今度の鳥海行で、先年白岩岳登山の際にもお供した秋田支部の武田益太郎先生と旧交を温め得た喜びに浴した時に、和賀岳の登路開設の記念に同氏の書かれた句碑が頂上に立ててあるからと伺ったばかりなのである。さら小生にとっては遊心押さえ難しというところ、年甲斐もなく張切って勇躍出かけた次第である。

太田町側からのルートの小路又から森林帯を一時半ぐらいたったところにてきた立派な避難小屋に一泊、翌朝は六時出発で、倉方への分岐点を過ぎ

てから間もなく尾根通し一筋に薬師岳、薬師平、一二九mの三角点の白岩岳への分岐点、小鷲倉岳などという突起点を越えたりくんだり、時には無数の色とりどりの花にことよせて一服つけながら、いつになく、足取りも軽く尾根歩きを続け、十時半に四十年来の憧れの山に立つことができたのだが、牧野君が、またいち早く小生の気持を察してか、自らの歩を止めて遅れ勝ちの小生に「あなたから先に……」と三角点直前にあたるとまれば思はず胸の高鳴りを覚え、まずはホットした次第である。一面、チングルマに覆われた緩やかな斜面の頂上に歩を休め、生憎のガスのために水気を帯びて判読しにくい石塔を、いそいそと軍手で拭いて、「岩根にカモシカ、笹やぶに熊、谷川にサルも遊んでる」の武田先生の鮮やかな筆跡が浮かび出て来た時には、瞬間、フト、二、三日、鳥海登山の途中、植物には特に造詣深く、さながら生辞引にも等しい先生が、登路わきに咲き乱れる花と、先生で、何事か囁き合っておられるのではない、否、花の方から話しかけられているのではないかとまで思わすようなかつこうで、間近の一輪、一輪にいちいち、愛撫の手をさしのべながら八十歳の老体を運んでおられた、好々爺そのものの姿がボーと眼前に浮かんで来たのであった。まさに一幅の日本画のような情景であったのだから……

こんなことを併せ考えざるを得なかった和賀岳の今度の登山は小生の数少ない登山歴に、まさった「金字塔……」とでもいいたところだ。恐らく、山登りの経験ある連中なら、なかには、一つ二つは何か妙に気を引かれる、ただ、無性に「あの山こそは……」、しかなかなか登れる機会が来なかった……いわば久恋の山というものがあろうと思うが、小生にとっ

てはこの和賀岳と、今年四月末に登った会津の丸山岳の続きの北沢岳がまさにこの部類に属するものであっただけに今年はアタリ年とでもいおうか。何年経っても年甲斐もなくこんな子供供だましみたいなのだから他人から見たら馬鹿みたいなものかも知れないが。そんな、包みきれぬ喜びに胸をふくらませながら和賀岳から取って返し、またまた、柴田支部長の御好意による車で小路を後に、横手、湯沢をすぎ、夕日に背をいたる鳥海山の富士山そっくりの形に驚いたりしながら泥湯温泉に着いたのは日暮にほど近い時刻であった。

泥湯は柄尾又みた、農家の人相手の自炊客ばかりの温泉で、判りにくい秋田の老男女と泥湯の湯にひたした時は、久しぶりで、山奥に来た……の感を深くしたのであった。

翌日はどうせ、ここから高松岳、山伏岳を歩いて明の内に帰れる楽な行程であるので、朝方、ひとときの雨のせいもある、朝も九時をすぎに止まった。やがて、雨もすっかり上がり、小安岳と高松岳の鞍部に出た頃には一面の青空に変わり、尾根一筋にきりひらかれた登路を辿って行くのだった。近くには虎毛山、遠くには神室山などの景観を楽しみながら頂上目指す足りはいとも軽い。

高山植物には素人はだしの、該博な知識の所有者……ツイ先日亡くなられた武田久吉先生からは「君は高山植物を育てるのはなかなかうまいね……」とまで賞讃の言葉をいただいていた牧野さんは専ら路傍のシラネアオイやゴゼンタチバナの採集に忙しく、その間、登ることしか知らない無趣味の小生は左右の景観をむさぼりつつ高松岳頂上手前の立派な避難小屋に着いたのは正午すぎであった。ツイ数日前、

越後の国境踏査報告書

越後山岳 第6号

日本山岳会越後支部編

越後衆の鈍と根

深田 久彌

昭和四十年六月、日本山岳会越後支部佐渡総会に、新潟県全踏査縦走計画の発表があった。五万分之一の断面図が、パノラマ風に巻紙に描かれたのを、部屋の方の壁から延々と次の壁に移った時、私は思わず笑いだした。感嘆でも恐怖でも、度をすぎる笑いだしたくなるものだ。

こんな途方もない思いつきは、越後衆の「鈍」なら、それを本気に実行したのは、越後衆の「根」であらう。越後名物の猛烈な数濃き、迷路のように錯綜した尾根、越えねばならぬ無数の突起、こんな山歩きは酔興でできることではない。この緑の下力持ちな仕事には、派手な海外登山に劣らぬ努力と闘志がいる。越後支部にはそれがあつた。身心共に強靱な団結と融和の「底力」というより養力があつた。

六八年九月 A5版 本文五三八頁 写真一七頁 地図一〇図 新湯市学校町二 富士波出版 振替 新潟二七四番

七〇年二月 A5版 本文四二二頁 写真一二頁 地図二六図 八〇〇円 千一四〇円

上信越国境を歩む

ふるさとの山

中村 謙著

上越の山 一三〇余コース

信越の山 六〇余コース

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

佐渡の山と山の伝説

高所登山技術考 Ⅱ

村井 葵

人間は機械である

「人間は機械だ」と初めて言ったのは、フランスの哲学者デカルトだった。今から三百年以上も前のことである。デカルトは動物はただの機械で、人間は魂の支配する精密機械だと考えた。心臓の働きは、ポンプが油をモーターにおしこんで行きわたらせるように、血液を押し出して身体中にめぐらせることにある。しかも心臓はポンプの弁やその他の部分に似たものを備えている。同様に眼を写真機に比べ、神経を電線に比べ、皮下脂肪をボイラーのまわりの保温材に比べることができる。

人間機械を生活環境の厳しい逆境の世界にさらすことは、それだけ機械が壊れやすくなることにつながる。一定の体温、血圧を保って燃焼し続ける生体をいきなり低温低圧環境にさらすと、風や低温によって燃焼器具の性

能が低下するように、機械の運動効率が悪くなる。そればかりかホールデンが言うように、酸素の欠乏が単に機械を止めるだけでなく機械を破壊してしまう場合もありうるのである。

学生登山と高所

健全な若者が、可能性の限界を追求し、より高い未知なものへの憧れを持つことはごく自然なことと思える。少なくとも物質文明という温室の中で、安易な生き方のみを走りがちな当世において、大自然の中で身体を鍛え、ものを考える若者の出現は大いに歓迎すべきであろう。

しかし純粋な情熱と心身の練磨だけで七千m以上のピークに登れるだろうか。これは非常に難しい問題である。若い学生たちの内地での厳しい訓練の習慣というものは恐ろしいもので、「高所寒害」とか「防御」という肝心なことを忘却させるほど苛烈で前向きな山登りをさせてしまうケースが多いのである。これは逆に言うと視覚の狭い山登りという他ない。

生体の機械が破壊することがあり得るのである。日本の山では、健康体でありさえすればかなり苦しい荒行が連続しても死ぬようなことはまずあり得ない。私の学生のときの新人の訓練を思い起こすと、「自分はいながら、その積み重ねによってモリモリと目に見えた体力がついていったと記憶している。それは人間の身体には限界がないことを教えるほどであった。新人時代をすぎた二年生になったとき、「苦痛と不安に顔のゆがんだ新人について、自分はそれ以上の荷物を持ってでも平然と歩けるようになっていた。雪溪のかけ登りもできたし、息はきれたが休むとすぐ身体が元通りになった。これは疲労耐性が高められ、訓練によって回復力が増大していることを物語るものであった。酸素の充分にある内地の山ではこの訓練のパターンが通用するのであり、未来のビッグ・クライムのために必要なことがらなのである。

その後、私たちは南米のアンデス山脈に出かけ、ヒマラヤのジャイアンツにそなえる氷壁トレーニングをやった。アルパマヨに登りながら、六千m前後の山であれば、学生のときに培ったガムシャラな山登りがある程度通用することを確かめた。天気がよくて身体のコンドیشنもベストに保てたことが、私の思いあがり、拍車をかけたようでもあった。八千m峰は、あたたかさが二千m高だけではないか。ますますの気持に大きな誤りがあった。七千、八千という高度は、四千mにも満たない国内の山で培った純粋なファイヤと体力だけでは解決できない、難しい問題をやらせている。

早稲田と慶応の事故

一九七〇年、早稲田の現役による二回目の海外合宿が、十七人のメンバーで、ダウラ・ヒマールで行なわれたときのことであった。ツクチェ・ピーク（六九一五m）の頂上で、頂上を登ったアタック隊員が高所による事故を起こしている。特に死んだ菊池の場合にはABC（五千m）から第二キャンプ（六一〇〇m）まで上りつぱなしで、ほとんど高度順化を確かめないうちにアタックに出、十八時間以上も行動した後、事故を起こしている。内地での春山合宿でならあたりまえの行動といえるのだが、七千m峰では無謀という他ないのである。私は羽田に身内の学生の白い骨箱を迎えながら、やはり学生には七千mという対象は難しかったのだということを痛感した。

本年度委員会名簿

◇山岳研究所委員会 (委員) 山崎安治 安彦六郎、木村俊郎、高山忠四朗、早乙女綴次、村山雅美、今井田研二郎、中屋建武、伊倉剛三、山本孝治、堀内章雄、板倉勝正、(担当理事) 林和夫
◇婦人懇談会 (委員) 村井米子、川森左智子、佐藤テル、小倉重子、三枝礼子、山口節子、黒石恒、関田美智子、宮崎英子、岸本、宅間清子、清水春美 (担当理事) 須田紀子
◇自然保護委員会 (委員長) 島田巽 (委員) 渡辺公平、織内信彦、村井米

子、吉阪隆正、伊藤秀五郎、川森左智子、(担当理事) 板倉勝正
◇山日記編集委員会 (委員) 鹿野勝彦、池戸誠二郎、中村輝子、広島三朗、出田興生、(担当理事) 松久秀夫
◇遭難対策委員会 (委員長) 金坂一郎 (担当理事) 広谷光一郎
◇会報編集委員会 (委員) 田中栄蔵、近藤信行、春日俊郎、板倉勝正、小方全弘、大倉昌身、村井英、岸本、今成征三、宮代良治、担当理事 坂下中心、
◇図書委員会 (委員長) 小林義正 (委員) 山崎安治、伊倉剛三、大橋晋、野上成男、岩淵泰郎、伊藤博夫、福田宏年、山本良三、横山厚夫、村石幸

彦、武田満子、船山毅、大森久雄、(担当理事) 近藤信行
◇書評委員会 (委員長) 織内信彦、(委員) 島田巽、山崎安治、坂下中心、中島寛、野上成男、福田宏年、(担当理事) 近藤信行
◇青年懇談会 (委員長) 山崎安治、(委員) 宮下秀樹、神崎忠男、浅田治男、宮崎綾一、高橋聡、小川武、佐村雄三、今村千秋、三浦俊則、市川隆弘、宮代良治、(担当理事) 船山毅
◇財務委員会 (委員) 藤井運平、山崎安治、中島寛、伊倉剛三、林和夫、(担当理事) 中屋建武
◇集委員会 (委員) 中川武、小川

武、船山毅、西奥亮平、古畑勇、原田洋、望月晃、清水春美、豊島義明、三浦俊則、岡建治郎、(担当理事) 神崎忠男
◇海外連絡委員会 (委員) 牧野文子、近藤等、鈴木郭之、吉沢一郎、田村俊介、芳野越夫、向一陽、佐藤テル、関口周也、小味秀純、丹部節雄、雁部貞夫、山本健一郎、松本義夫、(担当理事) 神原達
◇医療委員会 (委員長) 辰広吉吉、(委員) 住吉仙也、北博正、田村扇一、中島道郎、長尾佛夫、広谷光一郎、三方淳男、岡部紀正、浜口欣一、(担当理事) 大森義雄

◇指導委員会 (委員) 山崎安治、金坂一郎、村木潤次郎、宮下秀樹、長尾佛夫、広谷光一郎、大森義雄、中島寛、鹿野勝彦、村井英、神崎忠男、降旗孟、宮崎綾一、広田靖典、(担当理事) 松永敏郎
◇高所登山研究会 (委員長) 金坂一郎、松永敏郎、中島寛、(担当理事) 宮下秀樹
◇支部連絡委員会 (委員) 伊倉剛三、(担当理事) 板倉勝正
◇山岳編集委員会 (委員長) 望月達夫、(委員) 原真、堀内章雄、(担当理事) 中島寛

以上

介 紹 書 図



中垣淑子画

鶴の舞

野尻 抱影著

短篇六十一を収めた随筆集。新旧のうちから珍しく星を除外したものだが、ところどころ雲間を洩れるように星が姿を見せる条りがあると、その文がやはり一だんと光彩を放つ。

たとえば、著者が以前永らく住んで居られた「桜新町」の一篇。関東大震災後の火の番の時、南へ開けた地平線すれすれに、東京の緯度では滅多に見られないカノープスを発見して、霜のきしむ細で、提灯を振りまわした話など、面目躍如である。またこの話や「ぼろ市・嫁市」(世田谷・玉川稲毛)や、近年書かれた「多摩今昔」の諸篇は、よき自然だった武蔵野や多摩丘陵への懐旧の情をそそる。

運命を象徴するようなアイヌの「鶴の舞」から採られ、著者の夫人(父は札幌農学校教授大島正健氏)の幼時が描かれている。家はかなり幅の広いきれいな豊平川の近くにあり、彼女は毎朝小さい兄について、藪の茂った堤の小道を、牧舎まで牛乳を買いに行く。川向うにアイヌのコタンがあって、メノコが白を掲げているのや、子供たちが走りまわっているのが見える。コタンへ行くことは禁じられているが、アイヌたちはこちらの病院などへ来る。毎朝川の向岸にメノコを待たせた酋長が顔を洗いに現われ、深々しい白いひげを念入りに洗う。大酋長らしいことが、彼女の家によく来るジョン・パチエラ氏から語られる。そのうち酋長からメノコの使者が来て、彼女を娘に呉れ、という。短いコタンをめぐる情景を彷彿とさせる好文章である。著者は人も知る博学であるが、弟の大仏次郎氏からもユーモリストと言われ、観察が鋭いと同時に茶目っ気が多い。「嫁市」「千里眼実験」「汁粉の殿様」「猿鍋」「女王家屋」など一読笑いを誘う。

興味を惹くのは「鷹匠結び」で、著者が中学生の頃、高野山へ登る途中で鷹助が教えてくれた草鞋の結び方。「ぼろはん、それでは草鞋が出来て、よう登れん」と、わらじの乳から紐を抜きとり、紐をふたすじに並べ、指の股から、かかとの輪に通して力が足首にだけかかるように結び「鷹匠結び」という履きかたや」と言う。

私も子供の頃の結び方を見たことがあるが、どんな種類の人だったか覚えていないし、勿論名称も知らなかった。その後この結び方に出会わないものか時折気にしていたが、著者は再度の巡り会いを軽妙な筆致で表現されている。「鷹匠結び」の名を一般に知らせた文獻として貴重な随筆である。雲助の口伝を自慢にして、後に南アルプスへも鷹匠結びで登ったという著者は、本書のアンカーに「遙けき山々」と題した一章六篇を置いた。「木暮理太郎さんに頼んで「東京から見える山」

を自分の雑誌に載せた」ことがあり、明治四十二年十一月の「山岳」に「白峰山北岳に登る記」を書いたことがあり、更に小島島水著「日本アルプス」の考証資料として、甲府から見た南アルプスの残雪の形「農牛」その他を提供した著者の、旧き山への愛着が静かに語られている。

その「山恋」は、庭に置かれた「北岳」と名づけた石から湧き出る(この石は著者の二階の書斎からよく見える)。この一篇は、「北に遠ざかりて雪白き山」の望岳に触れているが、友人の画家松島氏が新幹線車中から南アルプスの山を垣間見て描かれたというスケッチが添えられている。

また、「農牛」に関して、山寺氏撮影による地蔵岳の残雪の写真が載っていて、このスケッチと写真は何ともいえない深い味わいをもつ。「甲府の五年間、星ではオリオン、山では白峰」をシノニムにした著者の郷愁を堪らないまでに力を入れていることであろう。若き日の北岳行を綴った「野呂川古道」と「大カバン谷」の二篇は、現在の即席の登山に比べて、質朴な気分が溢れて、いきいきして昔の登山のよさを物語る。

「山国の雲」は甲府での五年間に見た雲の動きの美しさを捉えたかなりの長文で、描写がすばらしい。その一部分を記してみよう。

——甲府平の半分は、この華やかな空の反映で浮き上っていたのだが、西山のまっ黒な雲の堤も自らのおどろきでろしさに堪えられぬやうに、じりじりせり下って、もう一度太陽をその陰から押し出した。それで甲府平はいっぺんに夕日に輝きわたり、白峰、地蔵、鳳凰の連山もくっきり雲の上に起伏を現してきた。——

著者は高令(一八八五年生)にもかかわらず、今でも郊外の人なき歩道を自分の雑誌に載せた」ことがあり、明治四十二年十一月の「山岳」に「白峰山北岳に登る記」を書いたことがあり、更に小島島水著「日本アルプス」の考証資料として、甲府から見た南アルプスの残雪の形「農牛」その他を提供した著者の、旧き山への愛着が静かに語られている。

橋は山見台であり星見台であるとおっしゃる山好きである。最近の大作「星と東方美術」に続き、本書をお出しになった。更に一層のご健在を祈りたい。(川崎精雄)

昭和四十七年三月、光風社書店刊 B6判二五九頁 定価九五〇円

神々の白い峰 薬師 義美著

本書は一九六九年秋、ネパール・ヒマラヤ、ダウラギリ山群の未登峰、グアルジャ・ヒマールに初登頂した富山ヒマラヤ登山隊の隊長、薬師義美氏による個人的なグアルジャ・ヒマール紀行である。隊としての公式報告はすでに別に刊行されている(『グアルジャ・ヒマール』一九六九年富山ヒマラヤ登山隊著、一九七〇)。

この隊の業績はダウラギリ山群西部における本格的な登山活動の中でも先駆的なものであり、著者がいのように多分に好運に恵まれた点があるにせよ、高く評価すべきものである。つきも実力のうち、である。一九七〇年以降、この山域に入った各隊は、いずれも多少とも富山隊の成果を利用して、その上になつて活動を展開してきた。さて、本書は前述のように個人的紀行であつて報告書ではない。報告書と紀行とが補いあふ形で公刊されるとすれば、紀行においては客観的な事実よりも、主観的な解釈に重点がおかれるのが自然だろう。それが報告書にはもろきれない雰囲気や伝へることによつて、隊のありかたをより鮮明に浮き彫りにすることにもなる。著者の狙いもそのへんにあつたものと推察する。そこで、本書に描かれた隊の雰囲気や一言で要約するならば、ゆとりともいふことになるだろう。隊そのものが、はじめからたいした困難にもぶ

つからず、スムーズに活動を続け、余裕をもつて登頂に成功した、というわけではない。登頂自体がぎりぎりのタイミングであつたのだし、行動の記録を詳細におつていけば随所に悪戦苦闘のあとまたどやう。にもかかわらず本書から読みとれる隊の基調は、あくまでもマイペースをつらぬく、したたかな余裕であるように思われる。著者に率いられた隊が、このような基調を全体として保ち続けたであろうことを、私は疑わぬ。それが、結局は成功を導く最大の要因となつたであろうことも。

けれども、同時に、その著者にしても、迷いや焦りにとりつかれ、不安や悔恨に悩まされた時があつたにちがいない。未知の要素が多ければ多いだけ、そういう場面におこまれる機会も多いはずである。欲をいえば、そういう危険(たとえ、後になってみれば些細な、あるいは時として滑稽に思えるようなことであつても)における、生の感覚に乏しいような気がするのだ。

そんなことは、何もことをあらためて書くにも値しない、のかもしれないし、そうでなくとも時がたてば記憶は純化されてゆくものかもしれない。ただ、私があえてこんな感想をのべるのは、一つはそういう体験こそが、意識するとなつていかかわらず、次の行動を方向づける原動力となると考えるからであり、一つにはこのところ統発してやる感のあるヒマラヤでのトラブルやアクシデントに対して、著者などに実践的な立場から具体的に発言していただきたいからだ。本書がそのような場でないとなれば、別の機会を期待したい。

巻末付録の「ネパール・ヒマラヤ登山探検史」は八十七ページにおよぶ労作で、一九七一年十一月までの三一九

(九日六時三十分本会ルーム)

△出席者 成瀬 吉沢副会長 中屋 林 伊倉 松丸 神原 近藤 松永 広谷 大森 須田 中島 坂下 丹部 神崎 板倉 俣山各理事 小原 織内 金坂各評議員 今井監事

・吉沢副会長夫人御逝去に際し、本会より生花と、役員有志で香典一万円をお供えた。(伊倉)

・これについて吉沢副会長より謝辞があった。

・名譽會員武田久吉氏御逝去の件 五月二十三日朝、自宅で脳血栓のため倒れたと聞きおよんでいたが、かく口止めされたため御本人、御家族の心づかいを考え、御病状についてもお知らせせず申しわけなし。五月二十七日、御容態がよくなり、伊倉がお見舞に参上、意外にお元気な様子であった。六月一日、近くの通信病院に入院されたが、七日午後九時十八分お亡くなりになった。葬儀も、御本人、御家族の強い御意志で、近親者のみでのことであったが、名譽會員 霧の旅など親しかった方のみお知らせした。葬儀は九日午後十二時三十分から、カソリック神田教会で執行なわれ、本会から生花をお供えし、成瀬副会長が弔辞を捧げた。(伊倉)

・なお武田氏の追悼会を神崎、伊倉両氏から案をつくらせてもらい、適当な時期に開催したい。(中屋)

・ウェストン祭の件 昨年は二十五周年で五万円を助成したが、信濃支部では本年も五万円を予算を組み、五月二十七日文書で申し入れをして来た。財務担当者相談の上、

一万円の予算であるが、万止むを得ない事なので、予備費から四万円を支出し、五万円を助成した。今後は、予算編成期前に申し出るよう、信濃支部へ申し入れた。この件了承 (中屋)

・旅費 経理規定の件 前回提出の本件を、常務理事会で検討、旅費規定の第四条、汽車、汽船運賃二等とあるのは、普通運賃と訂正、旅程が一〇〇軒以上の場合は、特急料金の利用を認めるとし、宿泊料金は、三千円を限度として実費を支給する、と一部条文を変更した。経理規定は原案通りとするが、複式簿記については、十月一日より実施にうつしたい。この件了承 (伊倉)

・名譽會員岩永信雄氏より図書寄贈の件 六月八日、山崎、近藤が岩永氏宅を訪問、氏の御厚意にたいしお礼を申し上げた。六月中に整理をおこない、談話室に保管したい。(近藤)

・新旧役員懇親会 六月二十日午後六時から、ブリガンドで開催する。(神崎)

・常務理事会で検討の結果、本年は、テーブルに着席することにした。会場がマツヤサロンでは人数に制限があるので、中屋、丹部でプラザホテルに交渉する。(中屋)

・島田興史朗氏より椅子五十脚寄贈の件 會員島田氏より、椅子五十脚寄贈の申し出があり、林、伊倉両氏でお伺いし、現物を見た上で、あらためて計ることとした。(中屋)

・UIAA総会出席の件 神原達氏(オブザーバー)として、佐藤(氏)を正式代表として派遣する。滞在費半額(約三万円)は、本会より

助成することにした。なお、今総会で、日本開催の話が出た場合は、あらためて検討するが、本会の現状ではむずかしい。(中屋)

・山岳研究所建築に関する件 関係官庁、日本自転車振興会関係の手続きはすべて受理され、大額の助成金があることになったことは、関係各位の御努力のたまものと、あらためて感謝申し上げたい。六月中旬には設計図もで上がっているが詳しくは会報七月号を参照されたい。近く請負業者を呼び説明会を開いて入札制とする。七月早々には着工。十一月初旬までには完成させたい。①予算規模 ②募金計画の説明あり。會員には別途趣意書を送り、寄付金を募りたい。(林)

・この件了承 なお本経理は別会計として処理し担当者木村氏にお願いする。(中屋)

・火災事における処置に関する件 常務理事会で検討したが、人命尊重のみならず、会の重要書類保全のため耐火書庫を購入することにした。なお火災保険は、七月十日契約更新となるので、小原氏を通じ、契約額も二千万円とした。(伊倉)

・この件了承 秋田支部長任期満了、重任承認の件 秋田支部長より、任期満了、重任承認の願書が提出されたので、これを承認したい。(中屋)

・印鑑取扱に関する件 印鑑取扱責任者を岩佐職員とするこの件了承 (伊倉)

・名譽會員章制定に関する件 名譽會員章を新たに制定したい。デザインは案をつくり、次の理事会にはかりたい。この件了承 (伊倉)

・現地小集会、現地支部長会議に関する件

本年度現地支部長会議の助成金は一万円とする。来年度も同様。この件了承 (中屋)

・海外連絡委員会 UIAA総会に出席して、できるだけ現地の模様を伝えたい。また日本開催の件は話が出れば慎重に対処する。

・本年度のシャモニススキー登山学校の参加はとりやめた。一、ノルマン・ハーディ氏が五月二十日来日、佐藤(氏)、山口節子氏等が中心になってお世話し、また六月五日より小集会を開き好評であった。閉会後ブリガンドで有志が集まり、なごやかに歓談した。同氏は六月七日帰国

・JAC紹介英文パンフレットは七月八月をめどに印刷する。内容については、在日外国人にもはかり万全を期したい。

・日本アルプス紹介英文パンフレットは、予算五万円をフルに使い、単なる登山ガイドブックにせず、外国人必読書に仕上げたい。将来出版社からも刊行できるようなものを作するため、広く會員から編集者を募集する。(会報七月号掲載)

・台湾山岳会より、會員小味氏を通じて本会に記念楯の寄贈をうけた。本会からベナントと毎日グラフ「エベレスト」を贈呈した。

・かねてよりソ連アルビニズム連盟より、エベレストの情報および資料を送付して欲しいと依頼があったので、会長名で返信し、エベレスト登山報告書に大森氏よりの別刷を添え、田村會員を通じて、同連盟に届けてもらった。

・婦人懇談会 一、會員井本貴子氏が五月十六日デオ・チバで病死された。

一、七月二十二日ルームで、ビールパーティを開く。(須田)

一、日山協常務理事に、山崎、金坂両氏がきまつた。(丹部)

一、海外、特にインド、パキスタンについての現況について 自然保護委員会 一、会報で自然保護特輯をすべく企画している。(板倉)

・集會委員会 一、本年度の集會は毎月二十日として年間計画をたてたい。今年は山登りを反映した集會を計画するつもりであり、また広く會員の不满や意見を聞くように努めたい。(神崎)

・ウェストン祭出席報告 (伊倉) 次回常務理事会は 七月十四日 理事評議員会は 七月十四日

一、ソ連アルビニズム連盟のイエ・ギッペンレイテル氏あて、エベレスト登山隊高所生理学報告送付の件 本件は去る一九七〇年に同氏が本会に寄せられた送付依頼を、その後モスクワを訪問された織内氏にくつされた件で、その間の事情は「山」二九八号および三二〇号を参照されたい。それに対し本会から三田会長の公信として、返信の大変遅れたことをおわびして、大森理事執筆の高所生理の報告書別刷一部を在モスクワの田村俊介海外連絡委員に送り、同氏がロシア語に翻訳して直接ギッペンレイテル氏あてにとどけた(本年五月)。田村氏からの連絡によれば、ギッペンレイテル氏は大変喜ばれて、二時間半にわたって報告書の内容について詳しく説明された田村氏に対し、あらためて三田会長、大森理事に礼状を出すと言われた。また本会あてにソ連アルビニズム

年鑑、征服されし峰々」一九六八～一九六九年号が寄贈され、同書は田村氏から本会事務局に送付されたので図書室に収めた。

『山岳』第一号第三号覆刻版は九月中旬発売です。駿州田代山奥横断記、燕岳及大天井、白馬籠城記、別刷付録つき。三百部頒価千八百円(送料二百円)代金をそえてルムへお申込み下さい。第二号は目下発売中。残僅少

図書室便り (昭和47・6)

新刊図書受入報告

スキー・ジャーナル寄贈
(1)竹節作太著『遠近の山』 昭和47
朝日新聞社寄贈
(1)朝日新聞社編『探検と冒険3』 昭和47
(2)朝日新聞社編『探検と冒険7』 昭和47

山と溪谷社寄贈
(1)山本三郎著『登山者のための気象学』 昭和47
(2)滝本幸夫著『北の山―北海道55座の記録と案内―』 昭和47

国立公園協会寄贈
(1)東良三著『自然保護の父ジ・ン・ミヤ』 昭和47
実業の日本社寄贈
(1)串田孫一著『山のパンセ』 昭和47

集英社寄贈
(1)ルネ・デメゾン著、近藤等訳『素手の山』 昭和47
文芸春秋寄贈
(1)串田孫一著『自然と美と心』 昭和47

富士急行寄贈
(1)富士急行編『富士山―総合学術調査報告書―』 昭和46
ベリかん社寄贈
(1)松島駿二郎編『探検家になるには』 昭和47

産報寄贈

(1)石原慎太郎監修『素晴らしき冒険』 昭和47
白川書院寄贈
(1)伏木貞三著『近江の峠』 昭和47

木下是雄氏寄贈
(1)木下是雄、穂坂直弘著『スキーの物理と力学』 昭和47
土橋進一氏寄贈
(1)平野長靖著『尾瀬に死す』 昭和47

今井雄二氏寄贈
(1)今井雄二・喜美子著『花と水河』 昭和47
定期刊行物受入報告
(部報・会報)
(1)北海道自然保護協会『会報』No.12 (47-6)
(2)兵庫山岳連盟『兵庫山岳』No.61 (47-6)
(3)日本地図資料協会『古地図研究』No.28 (47-6)
(4)国立公園協会『国立公園』No.271 (47-6)
(5)京都山岳会『京都山岳』No.566 (47-6)
(6)東京営林局『みどり』No.6 (47-6)
(7)低い山を歩く会『低い山』No.84 (47-6)
(8)日本山岳協会『登山月報』No.39 (47-6)
(9)日本登山協会『山と雪』No.170 (47-6)

〔雑誌〕
(1)『アル』No.172 (47-6)
(2)『岳人』別冊72の夏山
(3)『岳人』No.301 (47-7)
(4)『山と溪谷』No.406 (47-7)
(5)『創文』No.109 (47-6)

〔その他〕
(1)神奈川県山岳連盟『まきわ木』No.24 (47-6)
(2)京都市中体連ワンダーフォーゲル委員会『活動記録』(1971.4～1972.3)

(3)山の自然を考える会『会誌』No.8 (47-6)
(4)『季刊人類学・別刷クランプのシエラ』における経済の変遷
(5)『カシミアの山―カシミア・ヒマラヤ登山隊報告―』
〔新着海外雑誌〕
1.『Appalachia』Vol. 38, No. 6, May 1972.
2.『The Newsletter』Vol. 26, No. 1, March 1972.
3.『Osterreichische Alpenverein』Jah. 27, Heft. 3/4, March 1972.
4.『Panorama of Slovakia』1972-2.
5.『Rivista mensile』Anno. 93, N. 3, Marzo 1972.

洋書受入報告
連アルゴリズム連盟寄贈
1. Izdatelstvo『Mysly』Pobezhdenyie Vershiny 1968-1969
Ceskoslovensky Horolezecky Sraz 寄贈
2. Karel Herman『Nemeco-Česky Slovnik pro Horolezece』
ルム日誌 (47年6月)

5日(月) 第二八三回小集会 ニー
ジョランド山岳会副会長ノ
ルナン・ハーディ氏講演会
6日(火) 自然保護委員会
山研委員会
7日(水) 会報編集委員会
8日(木) 青年懇談会
9日(金) 理事評議員会
12日(月) 桜門山岳会理事會
13日(火) 佐々木光子、杉山都子氏飲
送迎会
14日(水) 図書委員会
16日(金) 青年懇談会委員会
19日(月) 集會委員会
20日(火) 婦人懇談会
22日(木) 青年懇談会

23日(金) 財務委員会
24日(土) 医療委員会
26日(月) 会報編集委員会
27日(火) 学生部委員会
28日(水) 書評委員会
30日(金) 学生部例会
六月中来客者 四九四名

会員異動
終身会員(47年6月)
一六九 川喜田太郎
休会復活(47年6月)
五六一 林 知彦 177練馬区上石神
井一五二 石神井公園団地九一
五〇一 電話(〇三)九二〇一八五
八〇
物故会員
五 武田久吉 昭和四七・六・七逝去
一三〇 水田健之輔 昭和四七・六
一〇一 逝去
一六六 逸見真雄 昭和四七・六・
二八逝去

第十五回有志懇談会出席者氏名
△六月十日大義園内心泉亭▽
伊倉剛三 今井喜美子 今井雄二
今井嘉道 今村正二 岩永信雄 織内
信彦 金坂一郎 川森左智子 埴山毅
近藤恒雄 近藤信行 斎藤桂 坂倉登
喜子 坂下心一 桜井信雄 佐藤久一
郎 須田紀子 関根吉郎 瀬名貞利
田口二郎 諸岡一 中河与一 中屋
健二 名須川浩 沼倉寛次郎 野口末
延 日高信六郎 古沢肇 堀田弥一
松田雄一 松本熊次郎 三田幸夫 村
井米子 村尾金二 村山雅美 山崎金
次郎 山崎安治 山下一夫 渡辺公平

なお会報三二五号、右本文中、出席者四十三名は四十名の誤まりにつき訂正おわびいたします。(五十音順)

お知らせ

第二八五回現地小集会

渓流釣集会

日時 八月二十日(日)

場所 秋川国際マス釣り場
会費 千五百円(弁当持参)
交通機関 五日市線五日市駅より
バス養沢線竹淵下車

第二八六回現地小集会

コンパとハイキング

日時 九月二十三日(土)二十四日(月)

場所 八ヶ岳山麓 野辺山高原
会費 二千五百円
交通機関 小海線野辺山駅下車

第五回図書交換即売会

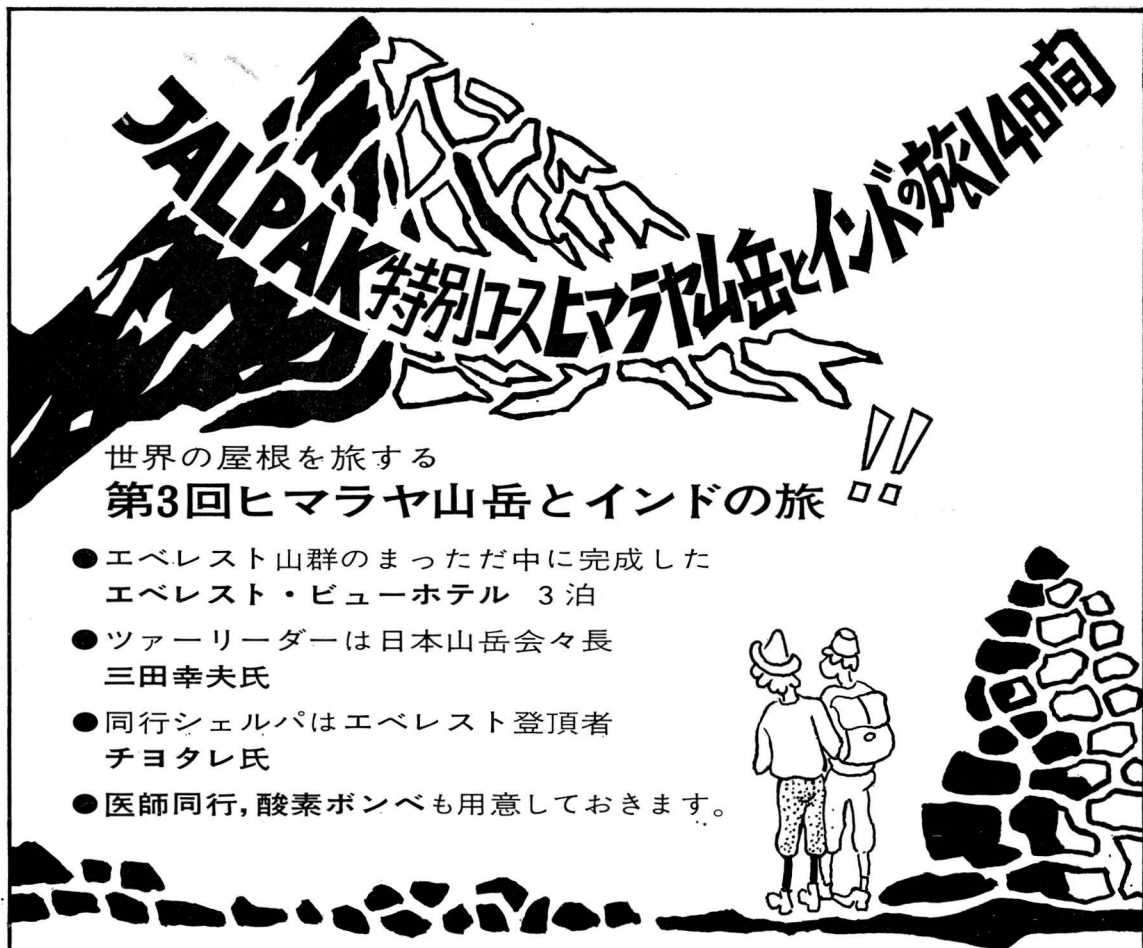
恒例の図書交換会は、十月二十一日(土)にきまりました。毎回、多くの会員諸氏から御協力をいただいてまいりましたが、本年も多数御出品くださいますよう、よろしく願っています。出品しめきりは十月七日(土)といたします。(図書委員会)

あとがき

上高地山研建築の募金がはじまり、臨時総会も十一月十一日にきまりました。会員諸氏からの一層のご協力をお願いします。(坂下)

昭和四十七年八月十日発行

東京都千代田区神田錦町
三二二三 向井ビル
発行所 法人 日本山岳会
編集代表 坂下 心一
(293) 七四四一
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂



世界の屋根を旅する

第3回ヒマラヤ山岳とインドの旅

- エベレスト山群のまっただ中に完成した
エベレスト・ビューホテル 3泊
- ツアーリーダーは日本山岳会々長
三田幸夫氏
- 同行シェルパはエベレスト登頂者
チヨタレ氏
- 医師同行、酸素ボンベも用意しておきます。

団長：三田幸夫氏

期間：昭和47年11月4日～11月17日 費用：¥368,000(ローン可)

日程

- 1日目：東京→バンコック
- 2日目：バンコック→カトマンズ
午後市内観光
- 3日目：カトマンズ→ルクラ、ルクラ
から徒歩にてゾサレへ、キャ
ンプ泊
- 4日目：ゾサレからナムチェバザール
経由徒歩にてエベレストビュー
ホテル(泊)
- 5日目 { エベレストビューホテル滞在
エベレストをはじめとしヌブ
ツェ、ローツェ、アマ・ダブラ
ムの眺望を楽しむ
希望者はタンボチェ、ゴーキ
ョヘトレッキング
(希望者は第6日目ルクラへ向
い途中、民宿またはテント泊)
- 6日目

- 7日目：エベレストビューホテルから
ルクラへ徒歩で約7時間
民宿またはテント泊
- 8日目：チャーターフライトでルクラ
→カトマンズ、午後カトマン
ズにて自由行動
- 9日目：カトマンズ→ポカラ
マチャブチャレ、ダウラギリ、
マナスル等の眺望を楽しむ
- 10日目：終日自由行動
- 11日目：午前中自由行動
ポカラ→カトマンズ
- 12日目：カトマンズ→ニューデリー
- 13日目：特別バスにてアグラ観光、タ
ジマハル等を見学
- 14日目：ニューデリー→東京

○申し込み、問合せ先

三井航空サービス (03)504-0271

東京都港区新橋1-18-1 団体課/須山

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

ブータン感傷旅行

小方全弘著
〈菊判280頁〉定価980円

森林・草原・氷河

加藤泰安著
〈A5判482頁〉定価1,500円

すこし昔の話

初見一雄著
〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山

望月達夫著
〈B6判334頁〉定価960円

山の古典と共に

大島堅造著
〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・葎山

川崎精雄著
〈A5変型判340頁〉定価1,200円

雪原の足あと

坂本直行著
〈B5判206頁〉定価2,800円

シブトンの自叙伝

未踏の山河

大賀二郎・倉知敬記
〈A5判440頁〉定価1,900円

山日記1972年版

日本山岳会編
〈A6判368頁〉定価750円

山 岳

日本山岳会編
〈A5判〉
総索引 1,000円
65年 2,000円
64年 2,000円
63年 2,200円
62年 2,000円
61年 1,800円

国立公園カレンダー

国立公園協会編
〈A5判リング綴り〉定価960円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編
〈B6判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編
〈A6判126頁〉1集240円・2集280円

日高山脈

北大山の会編
〈菊判362判頁〉定価2,200円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著
〈菊判584頁〉定価2,500円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖
〈A変型208頁〉定価3,600円

アンナプルナ日記

京都大学学士山岳会編
〈A12取変型判170頁〉定価1,200円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編
〈A5判350頁〉定価900円

キンヤンキッシュ1965

東京大学カラコルム遠征隊編
〈B5変型判220頁〉定価3,000円

登山・スキー用具専門店

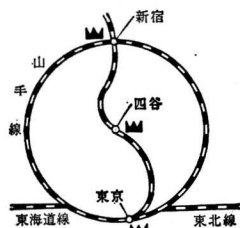
山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

●買いやすい
山の店

●北へ来たら
山の店

●フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地

TEL (351) 7432・1912

八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五

TEL (271) 1560・8575

新宿店 新宿ステーションビル四階

サービスショップ

TEL (352) 6564

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なるべくなんにも
持たない方がいい
けれども、どうしても
要るものがある。
なにしる人間ですか
そして登山ですか
どうして必要なもの
をここにえてみる
主責任はもっています

かたるぐシンテイ
でんや 281-8456
中央区八重洲4丁目

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座2-4-5 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座2-4-4 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上1丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440

